

2015-2018 年度

国際武器移転史研究所シンポジウム PDCA 資料
集客情報・参加者評価・改善点



榎本珠良

明治大学国際武器移転史研究所

2018年12月18日

目次

1	第1回（設立記念）シンポジウム.....	5
(1)	対象イベント.....	5
(2)	集客情報の集計結果.....	5
①	集客人数.....	5
②	事前登録者に対する来場者の割合.....	5
③	事前登録者の所属別内訳.....	5
④	事前登録したうえで参加したかたの所属別内訳（および参加／登録割合）.....	5
⑤	集計結果に関する若干の分析.....	5
(3)	参加者評価の集計結果.....	6
①	アンケート.....	6
②	アンケート：今回のシンポジウムを何で知ったか（複数回答）.....	6
③	アンケート：コメント.....	6
④	その他：来場者からのコメント・提案.....	7
2	第2回シンポジウム.....	8
(1)	対象イベント.....	8
(2)	集客情報の集計結果.....	8
①	集客人数.....	8
②	事前登録者に対する来場者の割合.....	8
③	事前登録者の所属別内訳.....	8
④	事前登録したうえで参加したかたの所属別内訳（および参加／登録割合）.....	8
⑤	集計結果に関する若干の分析.....	8
(3)	参加者評価の集計結果.....	9
①	アンケート.....	9
②	アンケート：明治大学の学生・教職員・OB・OGか.....	9
③	アンケート：コメント.....	9
④	その他：来場者からのコメント.....	9
(4)	評価と改善点.....	10
①	第1回目の評価に基づく改善点.....	10
②	集客情報や参加者評価に基づき、改善すべきと思われる点.....	10
③	第3回シンポジウム企画（1/18企画会議にて作成）における改善点.....	10
3	第3回シンポジウム.....	12
(1)	対象イベント.....	12
(2)	集客情報の集計結果.....	12
①	集客人数.....	12

②	事前登録者に対する来場者の割合.....	12
③	事前登録者の所属別内訳.....	12
④	事前登録したうえで参加したかたの所属別内訳（および参加／登録割合）.....	12
⑤	集計結果に関する若干の分析.....	12
(3)	参加者評価の集計結果.....	13
①	アンケート.....	13
②	アンケート：明治大学の学生・教職員・OB・OG か.....	13
③	アンケート：コメント.....	13
④	その他：来場者からのコメント.....	14
(4)	評価と改善点.....	15
①	第2回までの評価を受けて、第3回シンポジウム企画（1/18企画会議にて作成） にあたり改善を試みた点.....	15
②	①のうち実現できなかった点.....	15
③	改善案.....	15
4	第4回シンポジウム.....	16
(1)	対象イベント.....	16
(2)	集客情報の集計結果.....	16
①	集客人数.....	16
②	事前登録者に対する来場者の割合.....	16
③	事前登録者の所属別内訳.....	16
④	事前登録したうえで参加したかたの所属別内訳（および参加／登録割合）.....	16
⑤	集計結果に関する若干の分析.....	16
(3)	参加者評価の集計結果.....	17
①	アンケート.....	17
②	アンケート：明治大学の学生・教職員・OB・OG か.....	17
③	アンケート：コメント.....	17
④	改善案.....	18
5	第5回シンポジウム.....	19
(4)	対象イベント.....	19
(5)	集客情報の集計結果.....	19
①	集客人数.....	19
②	事前登録者に対する来場者の割合.....	19
③	事前登録者の所属別内訳.....	19
④	事前登録したうえで参加したかたの所属別内訳（および参加／登録割合）.....	19
⑤	集計結果に関する若干の分析.....	19
(6)	参加者評価の集計結果.....	20
①	アンケート.....	20

② アンケート：明治大学の学生・教職員・OB・OG か	20
③ アンケート：コメント	20
④ その他	20
6 第6回シンポジウム	21
(1) 対象イベント	21
(2) 集客情報の集計結果	21
① 集客人数	21
② 事前登録者に対する来場者の割合	21
③ 事前登録者の所属別内訳	21
④ 事前登録したうえで参加したかたの所属別内訳（および参加／登録割合）	21
⑤ 集計結果に関する若干の分析	21
(3) 参加者評価の集計結果	22
① アンケート	22
② アンケート：明治大学の学生・教職員・OB・OG か	22
③ アンケート：コメント	22
④ その他	22
7 第7回シンポジウム	23
(1) 対象イベント	23
(2) 集客情報の集計結果	23
① 集客人数	23
② 事前登録者に対する来場者の割合	23
③ 事前登録者の所属別内訳、全登録者のなかの割合	23
④ 事前登録して参加したかたの所属別内訳、登録者のなかの参加者割合	24
⑤ 集計結果に関する若干の分析	24
(3) 参加者評価の集計結果	25
① アンケート	25
② アンケート：明治大学の学生・教職員・OB・OG か	25
③ アンケート：コメント	25
④ 若干の分析	27
8 第8回シンポジウム	28
(1) 対象イベント	28
(2) 集客情報の集計結果	28
① 集客人数	28
② 事前登録者に対する来場者の割合	28
③ 事前登録者の所属別内訳、全登録者のなかの割合	28
④ 事前登録して来場したかたの所属別内訳、登録者のなかの来場者割合	29
⑤ 集計結果に関する若干の分析	29

(3) 参加者評価の集計結果.....	30
① アンケート	30
② アンケート：明治大学の学生・教職員・OB・OG か.....	30
③ アンケート：コメント.....	30
④ 若干の分析	32
➤ 今後の企画に向けた参考データ等.....	33
(1) シンポジウムの来場者推移	33
(2) 今後のシンポジウムの規模に関する選択肢.....	35

1 第1回（設立記念）シンポジウム

(1) 対象イベント

明治大学国際武器移転史研究所設立記念シンポジウム

軍備管理と軍事同盟の<いま>を問う

2015年11月17日（火）18:00-21:00

明治大学駿河台キャンパスグローバルフロント1階グローバルホール

(2) 集客情報の集計結果

① 集客人数

定員（目標集客数）：100名

来場者：116名＋未記帳の研究所関係者（目標の約130%）

② 事前登録者に対する来場者の割合

事前登録者：140名

事前登録者（研究所内の者を除く・受付の学生を含む）：134名

来場者（事前登録者）：95名

来場者（当日参加者）：21名

来場者／事前登録者割合：68%

③ 事前登録者の所属別内訳

明治大学（研究所内の者を除く・受付の学生を含む）：35名

他の研究・教育機関（研究所内の者を除く）：33名

企業・NGOなど民間の組織：34名

政府系機関：8名

メディア：7名

無職・なし：17名

④ 事前登録したうえで参加したかたの所属別内訳（および参加／登録割合）

明治大学（研究所内の者を除く・受付の学生を含む）：19名（54%）

他の研究・教育機関（研究所内の者を除く）：26名（79%）

企業・NGOなど民間の組織：23名（67%）

政府系機関：6名（75%）

メディア：3名（43%）

無職・なし：12名（70%）

⑤ 集計結果に関する若干の分析

集客目標は達成できたが、事前登録者のなかで実際に来場した者の割合（以下、来場率）は全体で68%と低めである。とりわけ来場率が低いのは明治大学（54%）およびメディア（43%）の関係者である。この理由としては、明治大学関係者は

ポスター等を見たり教員に案内されたりした学生の当日参加率が低く、メディアは当日に取材等の予定が入って来場できなくなったことなどが推測できる。これに対して、他の研究・教育機関（79%）や政府系機関（75%）の関係者は来場率が高いが、この理由としては、自身の専門分野や担当業務に関わるテーマであるなどして関心が高かった可能性が考えられる。無職・所属なしの方々の来場率も全体平均より若干高め（70%）だが、この理由としては、定年退職後などで比較的時間に余裕があったことなどが推測できる。

(3) 参加者評価の集計結果

① アンケート

アンケート提出者は35名であり、全来場者の約4分の1であった。そのうち7名のコメント欄は無記入（今回のシンポジウムを何で知ったかに関する質問に対する回答のみを記載）であった。

② アンケート：今回のシンポジウムを何で知ったか（複数回答）

- 明治大学のプレスリリース 1
- 明治大学のウェブサイト 7
- 明治大学内のポスター掲示 8
- 研究会や学会などのメーリングリスト 7
- その他のメーリングリスト、フェイスブック、ツイッターなど 2
- 「国際武器移転史研究所」関係者から個人メールアドレス宛てのメール 5
- 「国際武器移転史研究所」関係者による対面での案内 2
- 「国際武器移転史研究所」から郵送されたチラシ 0
- その他 8（東京新聞、父兄宛て明大ニュース、知人からの紹介など）

③ アンケート：コメント

コメント欄に意見が記入されていた28枚のうち、約半数には何らかの否定的なコメントが含まれていた。否定的な評価のうち、主なものは以下のとおりである。2回目以降のシンポジウムに向けて改善策をとるべきか（および、改善策をとる場合はどのようにすべきか）に関して、検討の余地がある。

- 4つの報告に一貫性がなく、「国際武器移転史研究所」の趣旨やシンポジウムの趣旨が捉えにくかった
- 武器移転史について聞きたかった
- 武器移転の具体的な事例について聞きたかった
- 歴史的視点から、最近の多国間での軍備管理・軍縮の課題や打開策を導き出すような研究があるとよい
- 内容が学術的とはいえなかった
- パワーポイントの内容を資料で全て配布してほしかった、パワーポイントをホームページで公開してほしかった、現場で来場者が撮影することを許可し

てほしかった

- 聞き取りにくかった、理解しにくかった、分かりづらかった、咳払いや会場内のパソコンの音がうるさかった

④ その他：来場者からのコメント・提案

イベント後に榎本にメール等によって宛てられたコメント・提案(8名)のうち、複数名によるものは次のとおりである。送付者は、現代の軍備管理・軍縮や移転規制の課題に取り組む政策志向の者(非政府団体系2名、政府系3名、民間研究者3名)であり、来場者全体の意見を表すサンプルではないものの、研究所の現代的意義を追求するにあたって検討の余地がある。

- 「国際武器移転史研究所」の目的・研究内容・焦点・方向性を示すことができていなかった。研究所が掲げる武器移転史や移転規制、軍備管理・軍縮を真っ向から取り扱わない話が多く、何をを目指しているのか、助成金を使用してどのような学術研究を実施する研究所なのか、不明瞭・不透明であった
- 現代の軍備管理・軍縮や武器移転に関する研究・政策論議において新たな視点を提示するような学術研究を、実務系研究者に外注するだけでなく歴史学者自身が行うようなプロジェクトにしてはどうか
- ATT に関する質疑応答のやりとりからして、来場者の側にも現代の課題に関する基礎知識がなかった。もう少しは議論が成り立つ場にしてはどうか
- PCM やイベント企画形成の仕方を内部者と共有するか何かして、プロジェクトの目的から個々の活動の子細までを繋げてはどうか
- この研究所が設立されたこと自体が新たな試みであり、今後に期待している

2 第2回シンポジウム

(1) 対象イベント

国際武器移転史研究所第2回シンポジウム

「航空機の軍民転用と国際移転」

2016年1月19日(火) 18:00-21:00

明治大学駿河台キャンパスグローバルフロント1階グローバルホール

(2) 集客情報の集計結果

① 集客人数

定員(目標集客数): 100名

来場者: 99名+未記帳の研究所関係者(目標の約110%)

② 事前登録者に対する来場者の割合

事前登録者: 134名

事前登録者(研究所内の者を除く・受付の学生を含む): 132名

来場者(事前登録者): 93名

来場者(当日参加者): 6名

来場者/事前登録者割合: 69%(※前回とほぼ同じ)

③ 事前登録者の所属別内訳

明治大学(研究所内の者を除く・受付の学生を含む): 30名

他の研究・教育機関(研究所内の者を除く): 20名

企業・NGOなど民間の組織: 49名

政府系機関: 7名

メディア: 3名

無職・なし: 23名

④ 事前登録したうえで参加したかたの所属別内訳(および参加/登録割合)

明治大学(研究所内の者を除く・受付の学生を含む): 24名(80%)

他の研究・教育機関(研究所内の者を除く): 12名(60%)

企業・NGOなど民間の組織: 33名(67%)

政府系機関: 4名(57%)

メディア: 3名(100%)

無職・なし: 12名(52%)

⑤ 集計結果に関する若干の分析

集客目標は達成できたが、事前登録者のなかで実際に来場した者の割合(以下、来場率)は全体で69%と、前回と同様に低めである。前回とは異なり、来場率が低いのは無職・なし(52%)であるが、これは、今回は登録時に所属の記入内容

が曖昧な者が多く、彼らを「無職・なし」に振り分けたことによる。前回と比べて、明治大学関係者の出席率が高い（80%）。また、前回に比べて、企業・NGOなど民間組織の関係者が登録者・参加者ともに多いが、これは登壇者の佐藤先生の報告に関心を持った企業者・市民運動関係者が登録ないし参加したためと思われる。

(3) 参加者評価の集計結果

① アンケート

アンケート提出者は47名で、全来場者の約4割である。前回の約2.5割より増加した。

② アンケート：明治大学の学生・教職員・OB・OGか

YES：20名

③ アンケート：コメント

約4割には何らかの否定的なコメントが含まれていた。否定的な評価の主な点は、以下のとおりである。

- 30分で実施可能な報告かどうか、事前にチェックしていないのか。途中で時間切れになるべきではない
- 報告内容を詰め込み過ぎて、言いたいことがよく分からなかった（佐藤先生を除く）
- 難しかった、分かりづらかった、消化不良だ
- 前回と同様に、現代に関する研究を行う部外者が現代的な意味付けをする形。歴史学者自身が歴史研究に基づいて分析・考察しているわけではない
- 学者以外の人も登壇すべき
- 質疑応答の時間をもう少し長めにしてもよいのでは
- 資料を事前にホームページで公開してほしかった
- 現場で来場者が撮影することを許可してほしかった
- こっそり撮影していた来場者をスタッフが止めるべきだった

ただし、肯定的なコメントも多かった。主なものは以下のとおりである。

- 3報告の内容のつながりがよく分かる構成であり、示唆的だった
- 歴史的なことを現代の課題にむすびつけて議論した点が良かった
- ドローンに関しての報告が勉強になった・興味深かった
- 質疑応答の内容が充実しており、面白かった
- 非常に有意義だった
- 次回も参加したい

④ その他：来場者からのコメント

- イベント後に榎本にメール等によって宛てられたコメントは、概して良好で

あった。「前回よりも国際武器移転史研究所らしい内容であった」、「明瞭な目的に向かって報告が構成されており、1つのイベントとして成り立っていた」など、好意的なコメントが寄せられた。

(4) 評価と改善点

① 第1回目の評価に基づく改善点

- 第1回目：「国際武器移転史研究所」の目的や趣旨を示すことができていなかった。研究所の中心課題やシンポジウムのテーマを真っ向から取り扱わない部分が多く、研究所が何を目標しているのか、助成金を使用してどのような学術研究を実施しているのか、不明瞭・不透明であった。4報告に一貫性がなく、研究所やシンポジウムの趣旨が捉えにくかった。
☐改善：研究所の趣旨を示すような内容にして、前回よりもテーマを絞り、3報告の一貫性を確保した。また、シンポジウムのタイトルや広報文で示される内容が実際の報告で扱われることを確保し、広報内容と実際の内容の落差をなくした。
- 第1回目：来場者のなかに専門外の人が多く、質疑応答が成り立たなかった
☐専門が近いかに、できれば質問していただければありがたいと伝えておいた。実際に質問していただけたため、質疑応答の議論の質が確保された。
- 報告者に報告時間厳守を依頼し、後半が圧迫されたり質疑応答の時間が圧縮されたりしないようにした。

② 集客情報や参加者評価に基づき、改善すべきと思われる点

- 報告がスキップぎみになったり、途中で途切れてしまったりした。この点に来場者による否定的なコメントが集中している。第1回に比べれば目的や趣旨が明確になりテーマが絞られたとはいえ、平日夜のシンポジウムにおける30分の報告としては、テーマが広がったかもしれない。
- 今回も、想定している主要ターゲット層と、実際の参加者層との間のギャップが顕著である。第1回に比べて、質疑応答の質が確保されたとはいえ、来場者の多くが専門外の人であることには変わりがない。テーマが広く報告が駆け足なこともあり、難しい・分かりにくい・理解できないと感じた人が多かったことが考えられる。
- 第1回に比べて質疑応答の時間が過度に圧縮される状況は生じなかったが、質疑応答の時間をもう少し長めにしてほしいとの意見もみられた。今後、主要ターゲット層の参加を促し議論を深めることも視野に入れて、質疑応答の時間を長めに確保することを検討しても良いかもしれない。

③ 第3回シンポジウム企画（1/18企画会議にて作成）における改善点

- 研究所のテーマや趣旨を示すような内容にしたうえで、テーマを絞る
- 報告者は3人にするが、各報告の焦点を絞り、各20分にまとめる
- 「シンポジウムのタイトルや広報文のキーワードが報告で扱われない」といった状況は必ず避ける
- 広報を工夫する。主要なターゲット層にアウトリーチできるようにする
- 冒頭で質問票を配り、休憩時間中に質問票を回収し、議論すれば面白くなりそうな質問を選ぶ形式にする。そのうえで、質疑応答の時間を長めに確保する
- 以上の点の必要性について、登壇者・企画関係者で認識共有し、タイムキープを徹底する

3 第3回シンポジウム

(1) 対象イベント

明治大学国際武器移転史研究所 第3回シンポジウム

「第二次世界大戦は不可避だったのかー軍縮・軍備管理から考えるー」

2016年5月31日(火曜日) 18:30~20:30(18:00開場)

明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階 グローバルホール

(2) 集客情報の集計結果

① 集客人数

定員(目標集客数): 100名

来場者: 120名+研究所関係者=約140名(目標の約140%)

② 事前登録者に対する来場者の割合

事前登録者: 175名

事前登録者(研究所内の者を除く・受付の学生を含む): 172名

来場者(事前登録者・研究所内の者を除く・受付の学生を含む): 114名

来場者(当日参加者・研究所内の者を除く・受付の学生を含む): 6名

来場者/事前登録者割合(研究所内の者を除く・受付の学生を含む): 66%(※前回・前々回より微減)

③ 事前登録者の所属別内訳

明治大学(研究所内の者を除く・受付の学生を含む): 21名

他の研究・教育機関(研究所内の者を除く): 51名

企業・NGOなど民間の組織: 48名

政府系機関: 4名

メディア: 6名

無職・なし・「一般」: 43名

④ 事前登録したうえで参加したかたの所属別内訳(および参加/登録割合)

明治大学(研究所内の者を除く・受付の学生を含む): 18名(86%)

他の研究・教育機関(研究所内の者を除く): 30名(59%)

企業・NGOなど民間の組織: 33名(69%)

政府系機関: 4名(100%)

メディア: 2名(33%)

無職・なし・「一般」: 27名(63%)

⑤ 集計結果に関する若干の分析

集客目標は達成できたが、事前登録者のなかで実際に来場した者の割合(以下、来場率)は全体で66%と、前回より微減し、低めである。前回よりも来場率が高

いのは無職・なし・「一般」(前回 52%今回 63%)である。これは、直前に東京新聞および毎日新聞に掲載された後に参加登録をした者が多く、モチベーションが高かったことが考えられる。前回と比べて、メディアの出席率が低い(前回 100%→今回 33%)。今回は広報を早めに開始したため、広報を見て参加登録をした以降に取材等によりスケジュールが変わったことなどが考えられる。

(3) 参加者評価の集計結果

① アンケート

アンケート提出者は 38 名で、全来場者の約 27%である。前回の約 40%と比べて減少した。減少した理由としては、予定より終了が遅くなったため来場者が帰路を急いだことや、シンポジウム前半に質問用紙にも記入をお願いしたため面倒に感じた来場者がいたことなどが考えられる。

② アンケート：明治大学の学生・教職員・OB・OG か

YES：15 名

③ アンケート：コメント

約 37%には何らかの否定的なコメントが含まれていた。否定的な評価の主な点は、以下のとおりである。

a. 全体に関するもの：3 名

- そのものの定義(「失敗」といった言葉の定義)があまりきちんとしていなかった
- シンポジウムのタイトルが羊頭狗肉である
- 「第二次世界大戦は不可避だったのか」というタイトルでシンポジウムを行うのであれば、それを軸にして話し合いをしてほしかった
- 戦前の軍縮交渉は現代における何に当たるのか、よく分からなかった
- (※以下は否定的な意味を含んでいるのか不明。ただの感想かもしれない)
「研究」による発見を未来にいかすことが最も重要である。何の為の研究かを常に意識して考えたい。リアリティが必要だ

b. 報告時間に関するもの：6 名

発表の時間が短い、発表の時間はもう少し長くてもよいのでは、報告時間が短い、報告者を 2 人にして各 30 分にしてほしい、質疑応答ではなく報告の時間を充実させてほしい

c. 質疑応答の時間に関するもの：1 名

講義が資料の棒読みなのであれば、資料などを事前に配布(HP かメール)しておくことで、質疑応答やディスカッションにもっと時間を割り当てることができ、より充実したシンポジウムになるのでは

d. 質疑応答の際の質問内容に関するもの：2 名

- 簡単な質問よりも、シンポジウムのタイトルに関わる質問にもっと時間を使

ってほしかった

- 無駄な質問、細かすぎる質問、講演者の能力を試すような質問ばかりで品がない。テーマに合った分かりやすい質問を取り上げて欲しかった

(※注) 他の質問用紙に書かれていた質問は、全く違うテーマの質問(核軍縮など)・意味がよく分からない質問・文字が荒くて読めない質問が多かった。小谷先生からは事前に質問候補を1問いただいたが、来場者からの質問も小谷先生に集中しており、来場者の質問を優先することになった

e. 質問用紙に記入いただいた質問への対応に関するもの:5名+添付ツイッター

- 質問をしたが取り上げられなかった。残念である
- 質問に対して発表者が譲り合っていたのは、あまりいただけない
- 質問に対する反応が少し遅い感じがした。キビキビした質疑応答を望む
- 質問に答えようとしなかったり、ちょっと酷いと思った。不快だった
- 質問用紙を配ってわざわざ記入を求めるのであれば、受けた質問に嫌がらずに答えるべきでは? 雰囲気が悪かった
- (添付ツイッター) 質問への対応の仕方と嘲笑が非常に不愉快だった

f. 質問方法に関するもの:1名

- 質問を実名制にして双方のコミュニケーションを大事にしてほしかった

ただし、肯定的なコメントも多かった。主なものは以下のとおりである。

- 大変良いシンポジウムだった。次回も楽しみにしている
- 今回は焦点が絞られており、3つの発表がストーリー性を持ちつつ多面性があり非常に効果的だった
- テーマを限定していて、シンポジウムとしては内容が鮮明で良い
- 法学部3年の学生。普段は抽象的な話を聞くことが多いが、歴史的・国際的な問題という抽象度の高い話を具体的な事情を説明しつつ話していて良かった
- 大変貴重な講義で参加させていただきありがたかった。知的な好奇心を刺激された。ありがとうございました
- 歴史の教科書では詳しく説明がない背景など大変興味深く拝聴した。また3人の先生各位で考えの異なる部分もあり見方が広がった
- 今後もこのようなシンポジウムを開催してほしい
- 大変勉強になった、理解できた、面白かった
- 有意義だった。今後もこのような企画の開催を希望する
- 小谷氏の報告が分かりやすく面白かった
- 色々な見方が紹介されて参考になった
- 非常に有意義だった。終日のシンポジウムの開催かつ海外の研究者もまじえての議論を期待している

④ その他:来場者からのコメント

翌日にツイッターやフェイスブックでの口コミを検索したところ、添付のとおりツイッターにてネガティブな書き込みがみられた

(4) 評価と改善点

① 第2回までの評価を受けて、第3回シンポジウム企画(1/18企画会議にて作成)にあたり改善を試みた点

- 研究所のテーマや趣旨を示すような内容にしたうえで、テーマを絞る
- 報告者は3人にするが、各報告の焦点を絞り、各20分にまとめる
- 「シンポジウムのタイトルや広報文のキーワードが報告で扱われない」といった状況は必ず避ける
- 広報を工夫する。主要なターゲット層にアウトリーチできるようにする
- 冒頭で質問票を配り、休憩時間中に質問票を回収し、議論すれば面白くなりそうな質問を選ぶ形式にする。そのうえで、質疑応答の時間を長めに確保する
- 以上の点の必要性について、登壇者・企画関係者で認識共有し、タイムキープを徹底する

② ①のうち実現できなかった点

- 各報告の内容が20分では不可能であった
- 主要なターゲット層(一定程度以上の専門性のあるかた)にアウトリーチしきれなかった
- 質問票が多く提出され、その中から質の良いものを選んだが、質疑応答時間の向上にはつながらなかった

③ 改善案

- 第1回目から第3回目まで、常に時間不足の問題がある。概して、一般向けの啓発を主目的にしたシンポジウムではなく、研究成果の発信やネットワーキングを主目的にしたシンポジウムを開催するのであれば、十分な報告時間と討論時間が必要になる。しかし、現在の時間帯のままでは、報告者は十分に説明できず、途中で報告が途切れてしまったり、スキップ気味になってしまったりする。来場者の多くは報告を理解しきれず消化不良になりフラストレーションを感じると思われる。質疑応答の時間も足りない。この時間帯で報告者数を3名にする限りは、この問題を解決することはできないだろう。イベントの目的・内容と、開催形態・日時設定に一貫性を持たせたほうが良いのではないか。
- 質疑応答を通じて来場者と有効に議論ができているとはいいがたい。事前に現代系テーマに関する専門家に質問をお願いしておいた第2回目を除いては、質問内容もあまり良くない。主要ターゲット層へのアウトリーチ方法および質疑応答の方法について、再検討が必要と思われる。

4 第4回シンポジウム

(1) 対象イベント

明治大学国際武器移転史研究所 第4回シンポジウム

「世界の大学における軍縮研究－ヨーロッパの研究・教育機関を中心に－」

【日時】 2016年11月22日（火曜日） 18:30～20:30

（18:00開場、質疑応答延長の場合も21:00までに終了）

【場所】 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階グローバルホール

(2) 集客情報の集計結果

① 集客人数

定員（目標集客数）：100名

来場者：99名＋研究所関係者＝約125名（目標の約125%）

② 事前登録者に対する来場者の割合

事前登録者：166名

事前登録者（研究所内の者を除く）：140名

来場者（事前登録者、ただし研究所内の者を除く）86名

来場者（当日参加者、ただし研究所内の者を除く）：13名

来場者／事前登録者割合（研究所内の者を除く）：61%（※前回・前々回より微減）

③ 事前登録者の所属別内訳

明治大学（研究所内の者を除く）：18名

他の研究・教育機関（研究所内の者を除く）：61名

企業・NGOなど民間の組織：38名

政府系機関：9名

メディア：3名

無職・なし・「一般」：11名

④ 事前登録したうえで参加したかたの所属別内訳（および参加／登録割合）

明治大学（研究所内の者を除く）：13名（72%）

他の研究・教育機関（研究所内の者を除く）：41名（67%）

企業・NGOなど民間の組織：18名（47%）

政府系機関：7名（78%）

メディア：2名（67%）

無職・なし・「一般」：5名（45%）

⑤ 集計結果に関する若干の分析

集客目標は達成できたが、事前登録者のなかで実際に来場した者の割合（以下、来場率）は全体で61%と、これまでで最も低い。前回までと比べて登録者数・来

場率ともに高いのは「他の研究・教育機関」（研究所内の者を除く）であり、第1回目 26/33 (79%)、第2回目 12/20 (60%)、第3回目 30/51 (59%)、今回 41/61 (67%) と推移している。この理由としては、開催前 10 日間の広報をこの層に絞り、開発・平和構築・安全保障・地域研究系の学生・大学院生が入っているメーリングリストなどを中心に広報を行った際に登録した者や、研究所関係者からのメールや直接の案内を受けて登録した者が多く、彼らは直前に登録したためにモチベーションが高くスケジュールの都合が良かったことが考えられる。これに対して、「無職・なし」等の登録者数および出席率は、前回までと比べて低く、第1回目 12/17 (70%)、第2回目 12/23 (52%)、第3回目 27/43 (63%)、今回 5/11 (45%) と推移している。この層は近隣住民の率が高いとが考えられるが、登壇者が日本人でなかったため、同時通訳が入るにせよ心理的バリアがあったかもしれない。

(3) 参加者評価の集計結果

① アンケート

アンケート提出者は 28 名で、全来場者の約 22% である。前回の 27%、前々回の約 40% と比べて減少した。減少した理由としては、質疑応答の時間が短く、書き込む時間がなかったことや、全て日本語のシンポジウムと比べてヘッドホンでの聞き取りに集中する必要があったことなどがかんがえられる。

② アンケート：明治大学の学生・教職員・OB・OG か

YES : 9 名 (32%)

③ アンケート：コメント

ほぼ全てが肯定的な評価であった。アンケートの約 37% に何らかの否定的なコメントが含まれていた前回に比べ、評価が高く成功であったと言える。今回は SNS のネガティブな書き込みもみられない。ただし、他の組織のシンポジウムではこのようなアンケート結果は比較的通常のことであるため、当研究所においてもこのレベルを保つことが必要だと思われる。

質疑応答の時間が短く、質問を受け付けなかったことについて、この時間をもう少しとってほしいとの意見がみられた。

a. 全体に関するもの

- 貴重な機会になった。
- 大変有意義だった。
- 非常に感謝しています。
- 非常に良い刺激を受けた。学術研究のありかたを考えるうえでためになった。
- マイオロ先生のプレゼンテーションが分かりやすく良かった
- クラウス先生のお話を聞く機会を頂戴し大変光栄だった。ありがとうございました。

- 学術研究の政策への影響力などについて、貴重なお話を伺うことができた。歴史的あるいは現在の戦争・軍縮研究には、日本においても重要な学術研究テーマとして発展性があると思う。この研究所の意義を感じた。
- 学術研究と政策との関係などについて、興味深かった。今後もこのような学際的・実務的な研究を行っている研究・教育機関での取り組みについて知る事が有益だろう。
- 両者とも、学問と政策決定との関係について積極的な姿勢が垣間見られ、興味深かった。日本の歴史研究者もこの点について思いをいたすべきだと考えた。
- これからの国際社会の根本に関わる問題なので、大変有意義だった。
- 海外の研究者との学術交流は大変大事なことで、今後も期待する。
- ゲスト1人に十分な時間が割り当てられていて、非常に良かった。
- フロアからの質問内容も良く、勉強になった。

b. 要望

- 質疑応答はとても参考になった。この時間をもっととってほしい。
- 質問を希望する人が多くいらっしゃり、対応しきれていなかった。この時間をもう少しとってほしかった。
- War studies と peace studies との観点の違いやアプローチの違いなどについてのシンポジウムがあれば是非参加してみたい
- King's Collage の War Studies のなかで、軍縮研究がどのように扱われてきたのかを具体的に話していただきたいかった。でも分かりやすく楽しい講演だった。
- 国際武器移転史に掲載されたタイミングで今回の参加者にリマインドいただけないか（注：これまでも実施しており、今後も案内をお送りする予定です）
- パワーポイントの資料を配布あるいは公開してほしい

④ 改善案

- 当初、集客状態が非常に悪く、招聘ロジや招聘両氏との共同出版企画と並行して、再広報のために非常に多くの時間と労力を費やすことになった。最後の10日間でなんとか通常より若干少ない程度の人数を集めたが、この程度の人数を集めるためのコストとしては全く見合わない。次回シンポジウムに関しては、より多くの研究所関係者に広報に関与いただく体制を作り、広報戦略を確定させたいうえで企画してはいかがか。

以上

5 第5回シンポジウム

(4) 対象イベント

明治大学国際武器移転史研究所 第5回シンポジウム

「冷戦期南アジアにおける軍事援助の展開」

【日時】 2017年6月27日（火曜日） 18：30～20：30（18：00開場）

【場所】 明治大学駿河台キャンパス リバティタワー12階 1126教室

(5) 集客情報の集計結果

① 集客人数

定員（目標集客数）：70名

来場者：31名＋内部者14名＝46名（目標の約66%）

② 事前登録者に対する来場者の割合

事前登録者（研究所内の者を除く）：41名

来場者（事前登録者、ただし研究所内の者を除く）：29名

来場者（当日参加者、ただし研究所内の者を除く）：3名

来場者／事前登録者割合（研究所内の者を除く）：70%

③ 事前登録者の所属別内訳

明治大学（研究所内の者を除く）：6名

他の研究・教育機関（研究所内の者を除く）：13名

企業・NGOなど民間の組織：14名

政府系機関：0名

メディア：2名

無職・なし・「一般」：6名

④ 事前登録したうえで参加したかたの所属別内訳（および参加／登録割合）

明治大学（研究所内の者を除く）：5名（83%）

他の研究・教育機関（研究所内の者を除く）：10名（77%）

企業・NGOなど民間の組織：8名（57%）

メディア：1名（50%）

無職・なし・「一般」：5名（83%）

⑤ 集計結果に関する若干の分析

来場者率は70%と若干高めだが、来場者数は集客目標の三分の二にとどまった。内部者・明治大学関係者および「他の研究・教育機関」（研究所内の者を除く）が参加者の大多数を占めた。企業・NGOなどからの参加者は少なく、省庁からの参加者はゼロであった。全般的に、参加者の大多数は、研究所内部者・明大関係者・その他大学の関連の研究者であったと言える。

(6) 参加者評価の集計結果

① アンケート

アンケート提出者は11名で、全来場者の約24%である。前回・前々回と比べて提出率は変化がない。

② アンケート：明治大学の学生・教職員・OB・OGか

YES：5名（45%）

③ アンケート：コメント

ほぼ全てに肯定的なコメント（興味深く拝聴した、よい勉強になった、充実した内容であった、参考になった、今回のように報告者は2名が丁度良いと思う、など）が記入されていた。全体的に高評価であったといえる。ただし、参加者の多くが研究所の内部者および明大・その他大学の関連研究者であったため、それ以外の方々からの意見が集まらなかった側面も指摘できる。なお、4枚には質問が記入されており、うち1枚には「時間がなく質問しなかった」と記されていた。

※これら質問を含め、アンケート用紙の内容は、懇親会の場で報告者と共有した。

④ その他

- 前回までのシンポジウムでは、毎回の集客に相当の困難があり、非常に多くの時間と労力を費やす結果となり、他業務の時間が大幅に削られていた。前回のシンポジウム後の運営委員会を通じて、会場の規模や集客目標のレベルを下げることを検討し、今回の企画となった。研究所単体での集客力レベルに鑑みれば、当面は研究志向のシンポジウムを企画し、同様の会場規模で開催することが妥当と思われる。
- ただし、このフォーマット及びレベルのイベントを実施し続ける場合には、参加者の大多数は研究所内部者や明大内外の関連研究者（外部者とは言い難い方々）で占め続けることが予想される。それに伴い、それ以外の方々に対する認知度・訴求力の向上には結びつかず、彼らからフィードバック・評価を得る機会としてもほぼ機能しなくなる。

以上

6 第6回シンポジウム

(1) 対象イベント

明治大学国際武器移転史研究所 第6回シンポジウム

「ブリティッシュ・ワールド研究の新視点—帝国紐帯の政治経済史—」

【日時】 2017年11月21日（火曜日） 18:30～20:30（18:00開場）

【場所】 明治大学駿河台キャンパス リバティタワー11階 1114教室

(2) 集客情報の集計結果

① 集客人数

定員（目標集客数）：70名

来場者：24名（目標の約35%）

外部者：13名

内部者・関係者11名（横井、竹内、福士、松永、高田、下斗米、葛西、西尾、榎本、勝田、明大広報）

② 事前登録者に対する来場者の割合

事前登録者（内部者・関係者を除く）：14名

来場者（事前登録者、内部者・関係者を除く）：12名

来場者（当日参加者、内部者・関係者を除く）：1名

来場者／事前登録者割合（内部者・関係者を除く）：85%

③ 事前登録者の所属別内訳

明治大学（研究所内の者を除く）：5名

他の研究・教育機関（研究所内の者を除く）：7名

企業・NGOなど民間の組織：1名（日経評のかた）

政府系機関：0名

メディア：1名

無職・なし・「一般」：0名

④ 事前登録したうえで参加したかたの所属別内訳（および参加／登録割合）

明治大学（研究所内の者を除く）：5名（100%）

他の研究・教育機関（研究所内の者を除く）：6名（85%）

企業・NGOなど民間の組織：1名（100%）

メディア：0名（0%）

⑤ 集計結果に関する若干の分析

来場者数は内部者を含めて25名で、集客目標の35パーセントであった。内部者・関係者以外の参加者は13名で、日経評の担当者のかたを除くと企業・NGOなどからの参加者はおらず、省庁からの参加者はゼロであった。ただし、外部者の来場

者／登録者率は高かった。これは、ブリティッシュ・ワールド・プロジェクトのメンバーである外部者や、極めて近い分野を専門とする研究者など、参加の必要があった（ないし意思が強かった）方々が多かったためと思われる。質疑応答も、内部者や極めて近い分野の研究者との議論であったため、質疑内容は関連性のあるものであった。

(3) 参加者評価の集計結果

① アンケート

アンケート提出者は8名で、全来場者の約33%である。

② アンケート：明治大学の学生・教職員・OB・OGか

YES：4名（50%）

③ アンケート：コメント

【数が少なかったため、以下、8枚全てのコメントの概要を示す。】

- ・ 帝国と宗教、ブリティッシュのみならず、様々な地域や時代にまたがる問題を取り上げてみたらどうでしょうか。
- ・ 自身の研究の助けになる話がいくつかあり、ありがたかった。ブリティッシュワールドにおけるオーストラリアも気になった。
- ・ 報告者の間の見解の違いも含めて詳しく聞くことができて有益だった。討論時間がもう少し必要。
- ・ 有意義な会だったと思います。竹内さんと福土さんの間で意見のズレもあることは気になるが、とにかく何か新しいものが生まれようとしているのは確かです。今後ともよろしく願いいたします。（勝田先生より）
- ・ 報告者どうしの研究視点の相違が研究の発展につながりそうで期待できる
- ・ 非常に刺激的な問題提起で、もっと討議の時間があれば良かった。
- ・ 我が国は大陸法系だが、外交的には英米法の国とつながりが多いため、その社会的背景を知ることは有益と思います。
- ・ インドおよびカナダと、イギリスの対照的な植民地関連の話、非常に興味深いものでした。19世紀におけるイギリスとカナダの関係が興味深いものでした。

④ その他

昨年運営委員会を通じて、会場の規模や集客目標のレベルを下げることになった。研究所単体での集客力レベルに鑑みれば、今後のシンポジウムも同様の会場で開催することが妥当と思われる。ただし、この場合には、参加者の大半が「身内」の状態が続くことが予想される。従来関係者以外に対する認知度・訴求力の向上やネットワーク拡大も狙う「パブリック・イベント」としての機能や、幅広いフィードバック・評価を得る機会としての機能は期待できなくなる。

以上

7 第7回シンポジウム

(1) 対象イベント

武器貿易条約（ATT）第4回締約国会議直前シンポジウム

「世界の武器移転をめぐる理想と現実」

【日時】2018年8月18日（土）13：00～18：00（12：30開場）

【場所】明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階 グローバルホール

【目的】

- 1) 2018年8月20-24日に日本で開催される武器貿易条約（ATT）第4回締約国会議の前に、多分野の研究者（歴史学、軍備管理研究、国際法など）および実務者（各国政府関係者、NGO、産業界など）が集合し、武器移転規制の歴史や締約国会議プロセスにおける現在の課題などを共有し議論をするプラットフォームを設定する
- 2) メディアをはじめ多くの人々を巻き込み、武器移転規制やATTについて議論し学ぶ機会を設け、一般の方々の意識・理解を高める。

【想定する参加者】

会場の規模からすると最大で200名弱。100-130名を目指す。研究者、学生、各国政府関係者、メディア関係者、NGO関係者、企業関係者（安全保障貿易管理担当の方々など）、国際機関関係者などを主なターゲットとしつつ、幅広く広報を行う。

(2) 集客情報の集計結果

※パーセントは小数点以下四捨五入

① 集客人数

集客目標：100-130名

来場者：176名（目標の135-176%）

うち外部者：156名

うち内部者・関係者・登壇者20名

② 事前登録者に対する来場者の割合

事前登録者（内部者・関係者・登壇者）：21名

事前登録者（内部者・関係者・登壇者を除く）：224名

来場者（事前登録者、内部者・関係者・登壇者を除く）：155名

来場者（当日参加者、内部者・関係者・登壇者を除く）：1名 ※民間組織のかた

来場者／事前登録者割合（内部者・関係者・登壇者を含める）：72%

来場者／事前登録者割合（内部者・関係者・登壇者を除く）：70%

③ 事前登録者の所属別内訳、全登録者のなかの割合

内部者・関係者・登壇者：21名（全体の12%）

明治大学（内部者・関係者・登壇者を除く）：11名（全体の6%）

他の研究・教育機関（内部者・関係者・登壇者を除く）：55名（全体の31%）

企業・NGOなど民間の組織：68名（全体の39%）

日本政府系：13名（全体の7%）

海外政府系：19名（全体の11%）

海外NGO系：10名（全体の6%）

メディア：24名（全体の14%）

無職・なし・一般・一般市民・主婦など：24名（全体の14%）

④ 事前登録して参加したかたの所属別内訳、登録者のなかの参加者割合

内部者・関係者・登壇者：20名（95%）

明治大学（内部者・関係者・登壇者を除く）：8名（73%）

他の研究・教育機関（内部者・関係者・登壇者を除く）：37名（67%）

企業・NGOなど民間の組織：49名（72%）

日本政府系：9名（69%）

海外政府系：9名（47%）

海外NGO系：5名（50%）

メディア：17名（71%）

無職・なし・一般・一般市民・主婦など：21名（88%）

⑤ 集計結果に関する若干の分析

- ・ 来場者数は内部者を含めて176名で、集客目標の135-176%であり、目標を上回る参加者を獲得することができた。第1回シンポジウム以降、参加者数は今回が最多であった。
- ・ 上述の「目的」の（1）および「想定する参加者」のとおり、本シンポジウムは、多分野の研究者（歴史学、軍備管理研究、国際法など）および実務者（各国政府関係者、NGO、産業界など）の参加のもとで、武器移転規制の歴史や締約国会議プロセスにおける現在の課題などを共有し議論する場を目指すことを目指していた。実際に、幅広い層の参加者を得ることができた。
- ・ 今回と同様に海外の登壇者を招聘して開催した第4回シンポジウムに比べると、事前登録者のなかで実際に来場した者の割合（以下、来場率）は全体で72%と高い水準であった（第4回シンポジウムは61%）。
- ・ 来場率・来場者数の双方とも高かったカテゴリーは、メディア（71%）、企業・NGOなど民間の組織（72%）、無職・なし・一般・一般市民・主婦など（88%）であった。これは、メディア関係者、企業の貿易管理担当者、NGO関係者、市民運動関係者（NAJATなどの活動家の一部は、参加登録時に一般、一般市民などと記入する傾向がある）など、シンポジウムのテーマであった武器貿易条約（ATT）第4回締約国会議（CSP4）に関心を持っていた層が登録し参加したためと考えられる。
- ・ 明治大学の教員・学生（内部者・関係者・登壇者を除く）は73%、他の研究・

教育機関の教員・学生（内部者・関係者・登壇者を除く）は67%と、研究者・学生も比較的来場率が高かった。

- ・ 来場率が低かったカテゴリーは、海外政府系47%、海外NGO系50%であった。登録した人の多くは、翌週のCSP4のために来日を予定していたり、各国の在日大使館勤務で関連業務を担当していた人々であった。日本へのフライトが遅れたり、CSP4直前の準備が間に合わなかったりして、スケジュールの都合で参加できなくなったことが考えられる（当日に、榎本宛に欠席連絡メールを送付したのもいた）。

(3) 参加者評価の集計結果

① アンケート

アンケート提出者は35名で、全来場者の約20%である。

② アンケート：明治大学の学生・教職員・OB・OGか

YES：7名（20%）

※明治大学の学生・教職員・OB・OGか否かによって、アンケートの内容に有意な相違はみられなかった

③ アンケート：コメント

※以下、可能な限り原文のまま記載。長すぎるものは要約

※判読不能な部分や、何かの問題（例：シリア情勢）に関する自説を述べたのみの部分（シンポジウムへのコメントではない）は除く

※全文が判読不能なもの、全文に何かの問題に関する自説を述べたものは除外

- ・ The symposium was well organised and the presenters adequately prepared their presentations which were so educative and well informing. A lot of pertinent issues were brought forward which are very relevant to the CSP4 and such information which may be very helpful in persuading states nor yet member to join.
- ・ Good symposium! I liked all the speakers and their presentations.
- ・ Interesting symposium. I enjoyed it very much. I hope you hold this kind of symposium again in the future.
- ・ The symposium presented a wide array of perspectives and not a biased view of the Arms Trade Treaty. The symposium was able to present most of the issues around the complex arms trade. The presenters gave excellent presentations. The organizers were very efficient and organized. It was well moderated giving all the speakers to present their views. Next time, larger room because it was full.
- ・ Very good and all good presentations. Maybe provide more time for Q&A.
- ・ Nice facility but WiFi access is normal these days.

- ・ 大変勉強になりました。
- ・ ATT について初めて知りました。参考になりました。
- ・ 初めて武器移転についてのシンポに参加しました。勉強になりました。
- ・ このような機会を設けて下さりありがとうございました。
- ・ このような機会をつくって下さり有難うございます。
- ・ 多変興味深く拝聴いたしました。ありがとうございました。
- ・ 多角的に専門家から説明があり、ためになった。
- ・ とても貴重なお話ばかりで勉強になりました。ATT 締約国会議にも注目していこうと思います。
- ・ ATT について、改めて詳しく知ることができました。大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ 武器移転問題を現在の問題として捉える良い機会でした。
- ・ ATT の背景、現状、課題を知ることができ、勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ 英語と日本語両方で聞けたのが良かった。武器の貿易については普段は取り扱うことがない分野だったので、このような知る機会があって良かった。
- ・ 初めて触れる内容でしたので、ついて行けるか不安でしたが、大変分かりやすい構成で勉強になりました。ATT の課題が具体的に理解できてよかったです。主催者登壇者の皆様に感謝します。
- ・ 内容、時間、分量ともに、素晴らしいシンポジウムでした。報告者も全員が第一線で活躍されている専門家の方々に、最先端の知見を聞けて、本当に貴重な機会でした。
- ・ 講演者だけでなく、大使からのお話を聞けて、びっくりしました。次回のシンポジウムも楽しみにしております。本日は、ありがとうございました。
- ・ 専門知識が無い状態での参加でしたが、基礎的な部分から最新の状況までを概観することができ、大変興味深く、勉強になる時間でした。武器移転などでの戦争に関わる分野は特に日本では知識を得難いところかと思えます。最先端の研究者の議論に日本語で触れる機会を頂き、御礼申し上げます。
- ・ 大雑把な概念ではなく、概念の説明から定量的な説明、そして事例と、非常に分かりやすかったです。そのため、問題点も明確でした。研究と行動がセットになっていることがとても良かったと思います。
- ・ ATT についてとてもよく分かりました。概論→各トピックというくみ立てが良かったです。
- ・ 非常に良い構成になっていたと思います。今回の議事を可能な限り『国際武器移転史』に掲載されることを期待します。
- ・ ATT 会議参加の予習のために参加しました。歴史的経緯も踏まえ、ATT の特徴や課題を理解することができました。

- ・ 通常のメディアでは知ることができない内容を包括的に聞ける機会は非常にありがたい。武器移転に関するこのようなシンポジウムを引き続き開催してもらいたい。
- ・ 大変良かったです。また、世界の各地域・国を代表する専門家をお呼びして、同様のシンポを開催していただければと思います。
- ・ 大変勉強になりました。ありがとうございました。国内外の政治家や起業家の方々のお話をお聞きできましたら幸いです。
- ・ 時間的制約のため、外国人講師陣のプレゼンを聴講することはできなかったものの、高見澤大使や日本人研究者の研究や解説により、武器移転に関するトレンドなどを十分理解できた。どうも有り難うございました。
- ・ 資料が充実しており、今日聞いた内容を振り返りやすいので、とてもありがたいです。セッション2の間にも休憩が欲しかった。
- ・ 質疑応答の時間をもっととるべきだと思う。

④ 若干の分析

- ・ アンケートでの評価は良好であったといえる。
- ・ アンケートの記述からは、関連の実務者・研究者ばかりでなく、予備知識があまりなかった層もシンポジウムに参加したことを読み取ることができる。大学の研究者や企業の安全保障貿易管理の担当者、政府関係者等は、他のカテゴリーの参加者に比べてアンケートに記入しない傾向があることを勘案しても、アンケートを提出したかたの多くは予備知識があまりない様子が伺える。
- ・ 上述の「目的」の(2)のとおり、本シンポジウムは、メディアをはじめ多くの人々を巻き込み、武器移転規制やATTについて議論し学ぶ機会を設け、一般の方々の意識・理解を高めることを目指していた。アンケートから、この目的がある程度は達成されたと言えるかもしれない。
- ・ 指摘や不満と思われる記述は、WiFiを提供すべき(1名)、次回はもっと大きな会場で(1名)、時間的制約により後半は聴講できなかった(1名)、セッション2の間に休憩が欲しかった(1名)、質疑応答の時間がもっと欲しかった(2名)といった点であった。5時間を超える長時間のシンポジウムであり、時間の都合などで途中で帰る人もみられたが、質疑応答まで残った人のなかには、より多くの時間を確保したゆとりのあるイベントを求める人もいたと思われる。
- ・ 希望・要請としては、今後も類似のシンポジウムを(3名)、今回の内容を『国際武器移転史』に掲載を(1名)といった意見がみられた。

以上

8 第8回シンポジウム

(1) 対象イベント

明治大学国際武器移転史研究所 第8回シンポジウム

「冷戦期における台湾・韓国の安全保障政策－軍事援助と軍事的自立化をめぐって－」

【日時】2018年12月18日(火) 18:30～20:30 (18:00開場)

【場所】明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階 グローバルホール

【目的】

- 1) 「産官学連携・軍事偏重型産業化モデルの国際比較」チーム(リーダー:横井、メンバー:渡辺、額瀨、須藤、白戸、山下、下斗米ほか)に参加いただく海外研究者を招聘し、国内の関連の研究者らの参加のもとで議論を深め、研究ネットワークを広げる。
- 2) 上記チームの研究を広く一般・メディアに周知して認知度・訴求力を高める。幅広い方々と研究内容を共有し、第三者からのフィードバック・評価を得るとともに、研究を社会に還元する。

【想定する来場者】

学内外の研究者、学生・院生、一般の方々、メディアをはじめ100名以上。

(2) 集客情報の集計結果

※パーセントは小数点以下四捨五入

① 集客人数

集客目標:100名以上

来場者:65名(目標の65%)

うち外部者:52名

うち内部者・関係者:13名

② 事前登録者に対する来場者の割合

※今回は、内部者・関係者に事前登録を求めていなかったため、内部者・関係者の事前登録についてはカウントしない

事前登録者(内部者・関係者を除く):66名

来場者(事前登録者、ただし内部者・関係者を除く):47名

来場者(当日参加者、ただし内部者・関係者を除く):5名

来場者/事前登録者割合(内部者・関係者を除く):71%

③ 事前登録者の所属別内訳、全登録者のなかの割合

村山首相談話を継承し発展させる会:26名(全体の44%)

明治大学(内部者・関係者を除く):18名(全体の27%)

他の研究・教育機関(内部者・関係者を除く):7名(全体の10%)

企業・NGOなど民間の組織:5名(全体の7.5%)

政府系：2名（全体の3%）

メディア：2名（全体の3%）

無職・なし・一般・一般市民・主婦など：6名（全体の9%）

④ 事前登録して来場したかたの所属別内訳、登録者のなかの来場者割合

村山首相談話を継承し発展させる会：21名（80%）

明治大学（内部者・関係者を除く）：12名（67%）

他の研究・教育機関（内部者・関係者を除く）：6名（86%）

企業・NGOなど民間の組織：1名（20%）

政府系：2名（100%）

メディア：1名（50%）

無職・なし・一般・一般市民・主婦など：4名（67%）

⑤ 集計結果に関する若干の分析

- ・ 来場者数は内部者を含めて65名で、集客目標の65%であり、目標を下回った。
- ・ 来場者全体の32%（21名）は、登壇者の瀬瀬先生が直前に参加を呼び掛けた「村山首相談話を継承し発展させる会」の方々であった。
- ・ 今回と同様に海外の登壇者を招聘して開催した第4回シンポジウムでは、事前登録者のなかで実際に来場した者の割合は全体で61%であった。これに対して、2018年8月の第7回シンポジウム（ATT）では72%、今回は71%と高い水準を維持している。
- ・ 過去シンポジウムと比べて、今回のシンポジウムにおいては、全登録者のうち明治大学関係者が占めた割合が高かった。明治大学関係者の登録者に対する来場者の割合は67%であり、全体（71%）を下回ったものの、一定の反応はみられたといえる。
- ・ 2018年8月の第7回シンポジウムの広報時には、明治大学の教員全員へのチラシ配布を実施しなかった。理由としては、学外広報のために多くの部数を必要とした、夏季休暇中で学内教員の来場率が低いことが予想された、学内で関連の研究を行っている（あるいは関心があるかもしれない）研究者が少なかった、などが挙げられる。これに対して、今回のシンポジウムにあたっては、明治大学の教員へのチラシ配布を実施した。このことは、少なくとも学期中に関しては、明治大学の教員に一律にチラシを配布することにより一定の登録者が得られる可能性を示唆するものと言える（テーマや登壇者次第かもしれないが）。チラシに関しては、部数を増やしても料金はあまり変わらない。今後も明治大学教員に一律にチラシを配布しても良いかもしれない。
- ・ 学外の研究者や学生、一般、メディアなどについては、登録者・来場者ともに少なかった。2017年度のシンポジウムの全体の来場者数は、第6回が46名、第7回が24名であったため、これらに比べれば今回は全体の来場者が

65名と増加している。ただし、先述の「村山首相談話を継承し発展させる会」の方々と研究所内部者・関係者を合わせると来場者全体の52%（34名）を占め、さらに他の明治大学関係者を合わせると来場者全体の70%（46名）を占める。

- ・ シンポジウム後に、「産官学連携・軍事偏重型産業化モデルの国際比較」チームの少数のかたに、榎本より聞き取りを行った。内部者・関係者が議論を深め、このチームの研究プロジェクトを進展させることに資するものであったとの評価がみられた。したがって、上記の目的1)『産官学連携・軍事偏重型産業化モデルの国際比較』チーム（リーダー：横井、メンバー：須藤、下斗米、渡辺、瀬瀬、白戸、山下ほか）に参加いただく海外研究者を招聘し、国内の関連の研究者らの参加のもとで議論を深め、研究ネットワークを広げる」は一定程度達成されたといえる。しかし、この目標のうち、研究所の外部の研究者らの参加や、研究ネットワークの拡大については、課題が残るかもしれない。
- ・ 上記目標2)「上記チームの研究を広く一般・メディアに周知して認知度・訴求力を高める。幅広い方々と研究内容を共有し、第三者からのフィードバック・評価を得るとともに、研究を社会に還元する」については、「村山首相談話を継承し発展させる会」の方々にフィードバックを頂く機会にはなったものの、特定のグループだけでない幅広い方々と研究を共有しフィードバックを得る機会になったとは言い難い。
- ・ シンポジウム後に、「産官学連携・軍事偏重型産業化モデルの国際比較」チームの少数のかたに、榎本より聞き取りを行った。その際、シンポジウムの評価書類を作成するにあたり対照する必要がある基本事項（例えばシンポジウムの目的や来場いただきかった方々）について、「知らない」、「瀬瀬先生に聞いてほしい」との回答がみられた。チーム内の他のメンバーがどのような広報を行ったのか、把握していない様子もみられた。基本的な目的やターゲット層・目標来場者数、必要な広報の程度・手段、広報に関する各自の役割分担等について、議論し共有する機会が不足していたように見受けられた。この点が克服されていれば、目的1)と2)の達成に近づくことができただかもしれない。

(3) 参加者評価の集計結果

① アンケート

アンケート提出者は28名で、全来場者の約42%である。

② アンケート：明治大学の学生・教職員・OB・OGか

YES：9名（21%）

③ アンケート：コメント

※以下、可能な限り原文のまま記載。長すぎるものは要約

※判読不能な部分や、何かの問題（例：東アジア情勢）に関する自説を述べたのみの部分（シンポジウムへのコメントではない）は除く

※全文が判読不能なもの、全文に何かの問題に関する自説を述べたものは除外

- ・ 台湾と韓国における、冷戦期の軍事的発展と変容について、よい理解が得られた。
- ・ 台湾・勸告の研究者の招聘は非常に新鮮で、新たな視点を得た感じがしました。
- ・ ぜひ今後も取り上げていただきたいテーマです。
- ・ 戦後の台湾と韓国の様子を、もっと学びたいと思いました。
- ・ 非常に新鮮であった。
- ・ 大変興味深い話でした。
- ・ 非常に面白い試みだと思います。
- ・ とても貴重な機会となった。台湾・勸告からの専門家をお招きしたことで、本シンポジウムの企画の斬新さを感じられた。
- ・ 非常に面白いシンポジウムでした。非常に多岐にわたる視点が必要であることを改めて実感いたしました。
- ・ 大変興味深かった。韓国の報告と比較して、台湾の報告は、地図等を活用し、聴衆に分かりやすく伝えようという熱意を感じた。台湾と韓国のお国柄の違いも感じる機会となった。
- ・ 冷戦期における日米関係を振り返りながら、聴くことができた。日本は台湾と韓国とは異なる事情を有していることが再認識できた。台湾・韓国から見た日本の安全保障にも興味を持った。
- ・ 今回のシンポジウム、貴冊子第7号か第8号に反映してください（質問も含めて）。新聞の軍事問題の記事が浅いとわかった。大学だけにイデオロギー（扇動）ではなく学問的追求でおもしろかった。
- ・ 東アジアのバランスに日本がどう貢献するのか、考えるヒントが得られた。ありがとうございました。
- ・ 台湾の自主防衛に関して、より深く理解できました。
- ・ 歴史をちゃんと回顧することの大切さを改めて感じました。ただ、米中新冷戦にも少し触れて欲しかった。
- ・ 2人の講師のお話は、演題通りで、我々聴衆にとってもレビューとしてよい機会ではありましたが、本音を申し上げると、なぜこの時期にこのテーマが重要なのか、私には理解できません。...（中略）...今年大きく変化した米朝関係・米中関係を踏まえて、今後の韓国・台湾の安全保障についてどう考えておられるのか、お聞きできるのではと期待してこのシンポに参加しました。.....コメントを頂ければ幸甚に存じます。
- ・ シンポの企画は大変興味があり面白いものですが、報告は東アジアの秩序形成という視点がやや欠けていたように感じます。また、主題の武器移転に関し、米国製で装備した国軍の実態についての見解も聞ければよいと感じた。

- ・ 防衛がより身近なものに感じられた。東アジアや東南アジアを対象とした軍事問題を研究する価値がある。ただし、その際、日本を加えてほしい。また、論点がかみあうように整理したプレゼンテーションを期待する。
- ・ 時間がもう少しあればと思った。資料が欲しかった。興味深かったです。
- ・ 時間を是非沢山とって頂き、次回はお二方の討論等も拝見したいです。本日はありがとうございました。
- ・ とても面白いためになるシンポジウムでした。もう少し Q&A の時間が多く取れば良かったと思います、次回は日本関係のことを扱っていただければと思います。
- ・ 冷戦下での安全保障に、最前線の当事者たちがどう取り組んだかという興味深いテーマではあったが、私には消化不良だった。スライドは写真撮影をさせていただければ理解の整理に役立つのだが、不許可の理由が不明。
- ・ 具体的な情報の説明でほとんどの時間が消化されてしまい、話をより深める余裕が足りなかったように思います。必要な具体的な情報については、レジュメなどで見てもらい、ある程度ざっと流せるようにしておいた方がよかったように思いました。
- ・ 最後の討論が時間が押していたのが少し心残りでした。また、劉先生・孫先生ともに比較的基本的な事柄の説明に時間をさいておられたので、簡単なレジュメがあるとスムーズに進むのではないかと思いました。

④ 若干の分析

- ・ 全体的に、報告の趣旨や内容については良好な評価であったといえる。
- ・ 明治大学の学生・教職員・OB・OG からは、肯定的な評価（興味深かった、など）の割合が比較的高かった。
- ・ おそらくアンケートの多くは「村山首相談話を継承し発展させる会」の方々が提出してくださったと思われる。非常に熱心に記述をされ、意見や思考、批判・不満も含めて多くのコメントをいただいた。この会の方々にフィードバック・評価いただく機会としては機能したといえる。
- ・ 批判・不満の多くは、具体的・詳細な説明に時間が割かれるなどして議論の時間が少なくなったことに対するものであった。この研究所のシンポジウムでは稀な「レジュメ無し」の開催であったが、これについても批判・不満がみられた。これら 2 点を関連した問題と捉える意見もみられた。つまり、具体的・詳細な説明に関しては配布資料に示して説明をスムーズにし、報告時間を抑え、より大枠の議論や討論、Q&A に時間を割くべきだとの意見もみられた。これらの点に関しては、今後シンポジウムを企画する際に留意する必要があると思われる。
- ・ シンポジウムも第 8 回目となり、なおかつ来場者数が少なかったこともあり、ロジスティクスが非常にスムーズであった。アンケートにおいても、ロジスティクス関連の批判・指摘はなかった。

以上

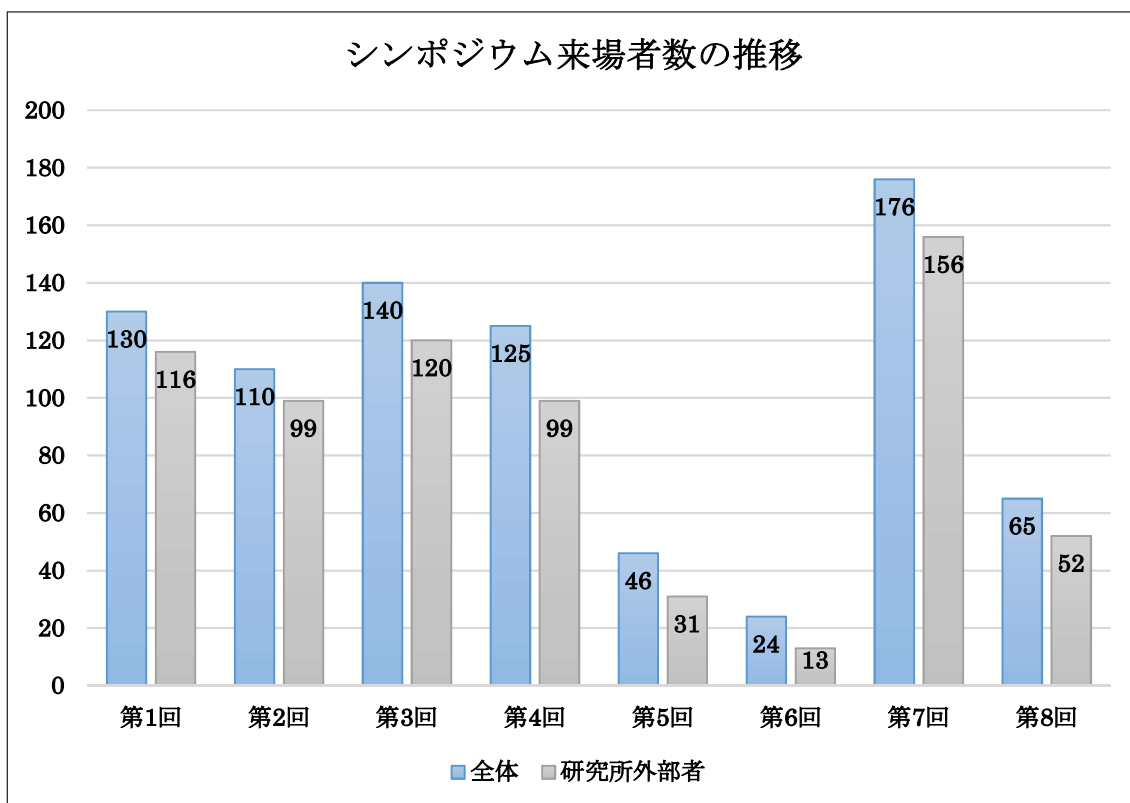
▶ 今後の企画に向けた参考データ等

(1) シンポジウムの来場者推移

以下、研究所設立以降の企画内容と広報担当・方法、来場者の推移を示す。

	テーマ	共通	日時	広報担当	来場者数
1	軍備管理と軍事同盟のくいまを問う	無	2015年11月17日(火) 18-21時	榎本(事実上) プレスリリース、明大広報、チラシ、各種メール、リスティングリスト広報、個人メールでの参加依頼、SNS 広報、榎本がアクセス可能な学会を通じた広報、他大学や NGO 等のイベント会場および近辺でのビラ撒きと声掛け、対面・電話勧誘、チラシ郵送等	全体 130名
					研究所外部者 116名
2	航空機の軍民転用と国際移転	無	2016年1月19日(火) 18-21時	同上	全体 110名
					研究所外部者 99名
3	第二次世界大戦は不可避だったのか—軍縮・軍備管理から考える—	無	2016年5月31日(火) 18-20時半 (21時まで延長可)	同上	全体 140名
					研究所外部者 120名
4	世界の大学における軍縮研究—ヨーロッパの研究・教育機関を中心に—	有	2016年11月22日(火) 18-20時半 (延長可)	同上	全体 125名
					研究所外部者 99名
<p>2016年度の運営委員会にて、研究所メンバーによる広報協力(各自がメールや SNS 等で参加を呼び掛けるなど)の可能性を検討いただいた。広報に協力することは難しい、手間をかけて広報活動を行わなくとも100名集まればよい(集まるだろう)との意見が多かった。2017年度は榎本による手間のかかる広報は実施せず、基本的な広報のみを行うことになった。そのうえで、グローバルホールではなく若干小さめの会場で開催し、目標来場者数を70名などに下げる可能性も検討することになった。</p>					
5	冷戦期南アジアにおける軍事援助の	無	2017年6月27日(火) 18-20	明確に設定せず 最低限、横井・榎本によりプ	全体 46名

	展開		時半（延長可）	レスリリース、明大広報、チラシ、過去シンポ参加者メールは実施	研究所外部者 31名
6	ブリティッシュ・ワールド研究の新視点—帝国紐帯の政治経済史—	無	2017年11月21日（火） 18-20時半 （延長可）	同上	全体 24名 研究所外部者 13名
<p>インスティテュート化を視野に入れて、各チームの運営能力を高めて持続可能性を確保する必要性や、各チームの目的や特色を反映した企画や広報を行う必要性が認識された。そのため、2018年度以降は、シンポジウムを企画したチームが広報やロジスティクスも担当することになった。</p>					
7	世界の武器移転をめぐる理想と現実	有	2018年8月18日（土） 13-18時	榎本（※特定チームの企画ではなく、ATT 締約国会議に向けた榎本個人の提案であった）	全体 176名 研究所外部者 156名
8	冷戦期における台湾・韓国の安全保障政策—軍事援助と軍事的自立化をめぐって—	有	2018年12月18日（火） 18-20時半 （延長可）	「産官学連携・軍事偏重型産業化モデルの国際比較」チーム（横井、渡辺、額、須藤、白戸、山下、下斗米ほか）	全体 65名 研究所外部者 52名



(2) 今後のシンポジウムの規模に関する選択肢

以下、今後のシンポジウムの規模に関して、例として7つの選択肢を挙げる。あくまで例であり、他の選択肢もありえる。各チームが活動計画を検討する際に参考となれば幸いである。

1. グローバルホールで開催し、会場が寂しい雰囲気にならない程度（100名）あるいはそれ以上の参加を得る。広報は企画者が担当	
PROS	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 「パブリック・イベント」として、従来の関係者以外に対する認知度・訴求力を高め、ネットワークを拡大し、幅広くフィードバック・評価を得ることができる ✓ 研究所が上記機能を果たしている状況を学内外に示すことができる
CONS	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 企画者の広報負担が大きく、疲弊する。特に招聘を伴う場合は負担が大きい
2. グローバルホールで開催し、会場が寂しい雰囲気にならない程度（100名）あるいはそれ以上の参加を得る。広報は該当チームのメンバーで分担（各自メールを送付するなど）	
PROS	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 「パブリック・イベント」として、従来の関係者以外に対する認知度・訴求力を高め、ネットワークを拡大し、幅広くフィードバック・評価を得ることができる ✓ 研究所が上記機能を果たしている状況を学内外に示すことができる
CONS	<ul style="list-style-type: none"> ✓ チームのメンバーのなかには負担感を感じる者もいるかもしれない
3. グローバルホールで開催し、来場者が少なくともよいことにする。広報は企画者が担当	
PROS	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 1の選択肢に比べて、企画者の広報負担が少ない <p style="text-align: center;">【多くの来場者が得られた場合には】</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 「パブリック・イベント」として、従来の関係者以外に対する認知度・訴求力を高め、ネットワークを拡大し、幅広くフィードバック・評価を得ることができる ✓ 研究所が上記機能を果たしている状況を学内外に示すことができる
CONS	<p style="text-align: center;">【来場者が少なく会場がガラガラになった場合には】</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 企画者によっては達成感を得られず徒労感を感じる（来場者数を気にしない企画者であればこれは感じない） ✓ 従来の関係者以外に対する認知度・訴求力を高め、ネットワークを拡大し、幅広くフィードバック・評価を得ることが期待できない。また、こうした機能を果たす目的で正当化する予算措置（同時通訳など）の正当化が難しくなる ✓ 研究所の上記機能が弱い状況を学内外に示すことになる ✓ 外部から招聘した際には、被招聘者に対して失礼にあたる
4. グローバルホールで実施し、来場者が少なくともよいことにする。広報は該当チームのメンバーで分担	
PROS	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 2の選択肢に比べて、チームのメンバーの広報負担が少ない <p style="text-align: center;">【多くの来場者が得られた場合には】</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 「パブリック・イベント」として、従来の関係者以外に対する認知度・訴求力を

	<p>高め、ネットワークを拡大し、幅広くフィードバック・評価を得ることができる</p> <p>✓ 研究所が上記機能を果たしている状況を学内外に示すことができる</p>
CONS	<p>✓ チームのメンバーのなかには負担感を感じる者もいるかもしれない</p> <p>【来場者が少なく会場がガラガラになった場合には】</p> <p>✓ 従来の関係者以外に対する認知度・訴求力を高め、ネットワークを拡大し、幅広くフィードバック・評価を得ることが期待できない。また、こうした機能を果たす目的で正当化する予算措置（同時通訳など）の正当化が難しくなる</p> <p>✓ 研究所の上記機能が弱い状況を学内外に示すことになる</p> <p>✓ 外部から招聘した際には、被招聘者に対して失礼にあたる</p>
5. 少し小さめの会場で実施し、50-80名程度（あるいは二桁台後半）の参加を得る。広報は企画者が担当する、あるいは該当チームのメンバーで分担	
PROS	<p>✓ 1-2の選択肢に比べて、企画者あるいはチームメンバーの広報負担が少ない</p>
CONS	<p>✓ 1-2の選択肢に比べて、従来関係者以外に対する認知度・訴求力を高め、ネットワークを拡大し、幅広くフィードバック・評価を得る機能は弱まる</p> <p>✓ 1-2の選択肢に比べて、研究所の上記機能が弱い状況を学内外に示すことになる</p> <p>✓ 会場に同時通訳ブースを設置することが困難な場合は、企画内容が制約される。ただし、この規模を目指すことは、一般の方々の参加が少ないイベントを目指すことを意味するため、そもそも同時通訳が必要ないかもしれない</p>
6. 少し小さめの会場で実施し、来場者が少なくてもよいことにする。20-50名程度でもかまわない。広報は企画者が担当する、あるいは該当チームのメンバーで分担	
PROS	<p>✓ 1-5の選択肢に比べて、企画者あるいはチームメンバーの広報負担が少ない</p>
CONS	<p>✓ 従来関係者以外に対する認知度・訴求力を高め、ネットワークを拡大し、幅広くフィードバック・評価を得る機能はあまり果たさない</p> <p>✓ 研究所の上記機能が弱い状況を学内外に示すことになる</p> <p>✓ 会場に同時通訳ブースを設置することが困難な場合は、企画内容が制約される。ただし、この規模を目指すことは、一般の方々の参加が極めて少ないイベントを想定することを意味するため、そもそも同時通訳が必要ないかもしれない</p> <p>✓ 来場者が20-40人程度の場合は、ほぼ内部者の会合となり、「シンポジウム」「パブリック・イベント」とは呼びがたい</p>
7. シンポジウムを開催しない	
PROS	<p>✓ 企画や広報の負担が一切生じない</p>
CONS	<p>✓ 認知度・訴求力を高め、ネットワークを拡大し、第三者からのフィードバック・評価を得て、研究を社会に還元する能力および意思が疑問視される。ただし、シンポジウム以外の手段によりこれらの機能を果たす場合を除く</p>